

2. 芸術は学びに味付けをしてくれる調味料…磨かれる感覚

教科学習の土台にしばしば「センス」というものが求められることがあります。例えば、語学のセンス、数学のセンスなどです。では「センス」とは一体どのようなものなのでしょう。

数学のセンスを例に挙げてみましょう。文章題や図形の問題で「答えがなんとなくこんな感じになるかなとある程度予測できる」、「根拠が自明のものとなっている」、「こうすればあれが求められそうだなと察知できる」、「この図形はこういう仕組みでできているものだなと気づいてしまう」など、理屈の前に理屈に沿ったことを感じる力でも言ったものが数学のセンスと呼べるものかもしれません。こういう力は詰め込み主義に基づいた学習では到底身につけることはできません。そんな力こそ「センス」と呼べるものではないでしょうか。

「センス」は先天的か、後天的かといういろいろな考え方があるかと思いますが、とりあえず両方考えられるとしていきましょう。つまり、生まれもったものでもあるし、生まれてから得られるものでもある。そんなものが「センス」です。それならば「センス」を身につけるためにはどうしたらよいのでしょうか。

これは、経験であったり、生活であったり、机の上での勉強以外で身につけられるものです。頭以外の肌で得られる力であるのです。

鉄棒の逆上がりで考えてみましょう。いくら「あ～して、こ～して」と考えてみてもなかなかできません。しかし、体で覚えてしまうとすぐにできてしまいます。自転車も同じです。自転車に乗れない人に理屈で自転車の乗り方を教えてあげても相手は自転車を運転することはできません。（自転車の運転の仕方って、サドルにまたがって、ハンドル握って、バランスとりながらペダルをこぐ、止まるときはブレーキを握る、そんなぐらいの説明しかできませんよね。）鉄棒の逆上がりも、自転車の運転も「これでできるんだ」という感覚が理屈を優先するのです。

教科学習にも同様のことが言えます。もちろん、理屈は絶対に必要です。しかし、それ以外に体で分かることも必要ですし、肌で分かることも必要なのです。数学の例でもう一度考えましょう。図形の問題を教えているとき、「ここがこうなっているから、 $\triangle ABC$ と $\triangle HIJ$ が合同になって、云々」と説明していると、「どうしてそんなこと分かるんですか。」「どうやってできるようになるのですか」という質問をしばしば耳にします。「どうして」「どうやって」というところがすでに頭だけでの発想、観察力なのでしょう。頭をちょっと休めてじ～と見つめ、気づくか気づかないかという感覚が問題を解くときには求められるのです。英語もそうです。声に出して読んでみればそんな語順では明らかにおかしいことに気づくはずなのに、そんなおかしい語順で英単語を並べて英文が作られる。音感、語感の大切さがよくわかります。

教科学習には様々な感覚が求められていると思います。目、口、耳で形成される感覚は教科学習には最も大切であるように思います。そういう感覚はどんな勉強で身につくのか。同じことの繰り返しになりますが、勉強では身につかないのです。しかし、感覚を身につけるちょっとした方法が芸術とのお付き合いであるように思うのです。これが絶対ではありません。感覚を磨くという意味では芸術と少しでもお付き合いしてみるのもいいのではないかと思うのです。それも、自然なお付き合いがいいのではないのでしょうか。初めから勉強のために芸術とお付き合いするというのは残念な結果しか導かないでしょう。感覚は頭によるものではありません。考えを持って人といいお付き合いをするのではないのと同じように、ただ仲良くなるためにお付き合いをするのです。そういうお付き合いの中でいろいろな感覚が生まれ、研ぎ澄まされ、洗練されていくのです。

どうも今一步のところで勉強に壁を感じている場合、一度頭をリセットする意味で、感覚を研ぎ澄ます芸術とのお付き合いをしてみるといいかもしれません。机の上の勉強だけではどうしても足りない味があります。一味加えてくれるのがもししたら芸術とのお付き合いであるかもしれません。

「芸術の秋」ということだけでなく、絵や音楽、芸能、いろいろな芸術とちょっとお付き合いしてみませんか。

文責：めがね先生

いかがでしょうか。中学1年生で学ぶ英文です。答えは、① ア、② イ、③ イ、④ ア、⑤ アとなります。ちょっとした日本語の違いに気づかれましたか。日本語であっても、話し相手（二人称）を示す「あなた」と「おまえ」ではぜんぜん伝わり方が違います。英語も同じです。日本語で文法・語法としては何ら問題がなくても、伝わり方はそれぞれ違うのです。

今回の書籍はそのあたりのことを漫画で書かれています。英語がちょっと苦手という方にもとても馴染み深く読めるのではないのでしょうか。（漫画を選んだからといって手抜きをしたとはどうかわらないでください。）

そんな本ではありますが、私が印象に残っている部分を引用してみたいと思います。英語を母国語とする原案者が最後に記した文です。

「ただいま」「おかえり」「いただきます」「ごちそうさま」

私は英語の表現にないこれらの日本語が大好きです。言葉に愛情がこめられている感じがするから――。

こんな日本語を大切にしてほしいですね――

日常生活の中で、だんだんお粗末になってくる「ただいま」「おかえり」「いただきます」「ごちそうさま」という表現。その表現の意味をよく考えてみると日本人の持つ温かみを感じることができます。英語から日本語を見直すと、日本語の気づかないところに意識を向けることができます。

本書をお子さんと一緒に読んで、日本語について考えてみてはいかがでしょう。

（とりあえず、私は「ただいま」「おかえり」「いただきます」「ごちそうさま」を言うことを心がけたいと思います。）

【編集後記】

なんとか早めの発行にこぎつけました。10月中の日曜日は勉強会に費やしてしまいました。塾の先生どうしでの勉強会。とても有意義なものです。そこで得たことを明日につなげ、よりよい学習環境の構築に努めていきたいと思います。11月もいろいろと忙しそうです。まあ、忙しいうちが幸せなのかもしれませんね。たとえ、忙しくても「心を亡くさず」といきたいものです。

先月、先々月とお便りをご紹介できましたが、今月は残念、1通もいただけませんでした。皆様からのお声をお待ちしております。2通、3通になっても全部ご紹介させていただきます。

